

高齢者が示す多様なエイジズムの実態と背景メカニズムの検討

菊地 亜華里

第1章 序論

年齢を理由とした差別は「エイジズム」と呼ばれ、主に高齢者差別として研究されてきた。エイジズムの最大の特徴として、年齢という属性の性質上、人々は差別する側から差別される側へ移行するという点が挙げられる。このように差別される側への移行に直面した高齢者は、以下のような一連の心理プロセスで対処しており、その結果、高齢者が主体の多様なエイジズムが観察されていると考えられた。第一に、高齢者は自分が高齢者であることを否定し、自分以外の高齢者を外集団とみなしてエイジズムを示すと考えられた(他者を否定するプロセス)。第二に、高齢者は自分が高齢者であることを自覚し、自分自身を含む内集団としての高齢者集団に対してエイジズムを示すと考えられた(自分を否定するプロセス)。第三に、高齢者は自分たちを若者よりも優れた集団であると認識し、外集団としての若者に対してエイジズムを示すと考えられた(自分を肯定するプロセス)。本研究では、高齢者が示すこれら3つの形態のエイジズムに焦点を当て、その実態と背景にある心理的メカニズムについて明らかにすることを目的とした。

第2章 外集団である高齢者へのエイジズムの検討

研究1では、高齢者が他的高齢者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、他的高齢者を自分と区別し、否定的態度を示すという、他者を否定するプロセスを仮定した。このプロセスでは、差別される側へ移行することへの不安(つまり、加齢への不安)が要因となってエイジズムが生じると考えられ、より高齢であるほどその関連が強くなると考えられる。そこで、本研究では、加齢への不安とエイジズムの関連の年齢差について、研究知見が豊富なアメリカと、長寿国であるが研究の蓄積が乏しい日本のサンプルで比較することを目的とした。アメリカ(18-75歳, $n = 886$)と日本(20-75歳, $n = 556$)で実施したオンライン調査の結果から、アメリカの参加者では不安とエイジズムの正の関連が高齢者のみでみられたが、日本の参加者では年齢に関係なく不安とエイジズムの正の関連がみられた。これらの結果から、日本の場合、高齢者のエイジズムの背景メカニズムとして予想された他者を否定するプロセスが、年齢にかかわらず当てはまることが示唆された。

第3章 内集団である高齢者へのエイジズムの検討

研究2では、高齢者が自分自身を含む高齢者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、自分が持っている高齢者へのステレオタイプに沿って、自身を過小評価したり、行動制限をしたりするという、自分を否定するプロセスを仮定した。本研究では、高齢者が内集団へ示すエイジズムについて、他の年齢層との違いや、外集団へのエイジズムとの関係性を明らかにすることを目的とした。18-100歳($n = 4974$)を対象に、若者/高齢者への肯定的/否定的態度を尋ねた。因子分析の結果、70代以下の高齢者では、「若者への否定的態度」と「高齢者への否定的態度」が独立して抽出されたが、80代以上の高齢者では、若者や高齢者といったエイジズムの対象集団によって態度が区別されなかった。また、70代以下の高齢者では「高齢者への否定的態度」の得点が「若者への否定的態度」の得点より低く、その差はすべての年代の中で最も顕著であった。これらの結果から、高齢者のエイジズムの背景メカニズムとして予想された自分を否定するプロセスは、若い高齢者においては当てはまるものの、より高齢な年齢層には当てはまらない可能性が示唆された。また、若い高齢者の場合も、自分を否定するプロセスより、

他者(若者)を否定するプロセスの方が顕著であることが示唆された。

第4章 外集団である若者へのエイジズムの検討

研究3では、高齢者が若者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、高齢者の優れた側面に焦点を当てて若者よりも優位に位置付けるといふ、自分を肯定するプロセスを仮定した。本研究では、高齢者が自分を肯定するプロセスがみられる具体的な評価側面、および比較対象を明らかにすることを目的とした。高齢者から若者へのエイジズムとして、現代の若者を一括りにして批判する「最近の若者効果」に注目し、73-79歳の高齢者($n = 390$)が「昔の若者(過去の自分)」、全般的な「若者」、「最近の若者」に対してもつイメージを比較した。分析の結果、高齢者は若者のイメージを、能力や活発さといった印象全般を評価軸とした「力量性・活動性」と、謙虚さや勤勉さといった社会的規範を評価軸とした「評価性」の2側面から評価しており、特に「評価性」において、昔の若者(過去の自分)を他の若者と比べて肯定的に評価していることが明らかとなった。これらの結果から、高齢者が自分を肯定するプロセスは、現在の自分にとっての強みである側面において、過去の自分を肯定するプロセスとして顕著にみられることが示唆された。

第5章 総合考察

本研究では、高齢者のエイジズムが生じる3つのプロセスについて検討した。研究1, 2, 3を通して、同年代(70代)の高齢者の間ですべての形態のエイジズムが観察されたことから、高齢者が示すエイジズムは同時に複数のプロセスで生起していることが示唆された。つまり、高齢者は、その時々状況や環境に応じて特定の年齢集団に対して回避的あるいは接近的になりながら、自尊心を維持していると考えられた。また、日本の場合、他者を否定するプロセスは若者と高齢者で共通していること(研究1)や、より高齢な年齢層では特定の対象へのエイジズムが観察されなくなること(研究2)が示唆された。一連の研究から、高齢者が示す個々のエイジズムについて詳細に検討していくことの重要性が確認された。それと同時に、個別に得られた知見を統合し、体系的な理解を進める必要性も示された。本研究の限界として、限られたサンプルで3つのエイジズムを個別に検討するにとどまった点が挙げられる。今後は、サンプルを拡大し、個人内でみられる複数のエイジズム間の比較や、それぞれのエイジズムの縦断的变化について検討する必要がある。(臨床死生学・老年行動学)